

私なりの『枕草子』

——キーワードから読み解く——

池窪弘務



by Seishonagon

目次

一	エッセイの誕生	2
二	清少納言という人	2
三	中宮定子との友情	3
四	枕草子は難しいか？	3
五	名文	4
六	女法師	4
七	言葉は千年の時空を越える	5
八	清少納言は不美人？	5
九	ユーモア	6
十	身分	7
十一	位	7
十二	清少納言をめぐる貴公子達	8
十三	端役の女	8
十四	ドキュメンタリー	9
十五	虫は(四十段)	0
十六	みんなと仲良くしたい	0
十七	雪三題	1
十八	文(ふみ)	1
十九	歌枕	2
二十	雨嫌いの筈が	3
二十一	『枕草子』と笑い	3
あとがき		4
【参考文献】		5

一 エッセイの誕生

——春はあけぼの（一段）——

「跋文」に『枕草子』執筆の契機を、当時貴重品であった「紙」が内大臣から中宮に献上されたこととしています。

天皇の方では中国の『史記』が書かれることになったが、中宮の方ではどうしようかという話になり、清少納言は「枕にこそはべらめ」と中宮に申し出、「では、紙を与えるので書きなさい」と言うことになったと書かれています。

五味文彦著『枕草子の歴史学』では、その内容は『史記』に対する「四季」であったと結論づけています。確かにこの頃は、中国を尊ぶ文化から日本文化に回帰する流れがあります。あちらが中国の『史記』なら日本の「四季」で行こうと。かくして、清少納言はこの第一段から書き始めたのだと思います。一人の女性が、それも、宮仕えの女房が、「春はあけぼの」と言った瞬間が、随筆という自由な文芸の始まりでした。日本の三大随筆は『枕草子』『方丈記』『徒然草』ですが、女性は清少納言だけです。それに彼女には固有の名前がない。清氏（一族）の少納言（職名）。最上位の地位の女性にしか名前はなかった。彼女はそんな時代に生きていたのです。

二 清少納言という人

——をかし——

『枕草子』には「をかし」が五百近くも頻出します。陽性な女性で、一人でいるより、みんなという方が好き。泣くより笑う。悲しい時に涙が出てこない。泣く時は素晴らしいものに感動した時。中途半端がいや。噂が好き。男をやり込めるのが好き。雨が嫌い。『枕草子』にはそんな性格が暴走しています。中宮の言うことも聞かないのですから相当なものです。

一方名文家です。私が声に出して読みたい選りすぐりの名文だと思ったのが、二十ヶ所ほど。「ものづくし」も名文です。

三 中宮定子との友情

——「これ、笹越しに候ふ」

(二百二十二段) ——

清少納言はひたすら中宮定子の素晴らしさを誉めそやします。中宮様は何もかもが素敵なのです。

ただ、二百二十二段と二百二十五段は定子の悲痛な想いが伝わってきます。

菖蒲の節句の日、妊娠中で食欲のない定子に、清少納言が青ざしというお菓子を「柵越しの麦でございます」と差し上げる件です。「私は馬じゃないわよ」と怒らずに、

みな人の花や蝶やと急ぐ日も

わが心をば君ぞ知りける

定子は清少納言を姉のように頼りにしていたのかも知れませんが。

四 枕草子は難しいか？

——上にさぶらふ御猫は(六段) ——

言葉は難しいが(千年前の言葉ですから)内容は難しくないと
思います。

深読みよりも簡単な解釈の方が正しい気がします。そう思う箇所が沢山あります。

この段の場合、御猫に飛びかかって放逐された翁丸と左遷された伊周と重なるとの指摘が多くされています。しかし、私は内裏で起こった事件を(自慢話を含めて)楽しく書いているような気がします。犬が涙を流したのが彼女の「をかし」を刺激した。

もう一つ、

——短くて、ありぬべきもの(二百十七段) ——

【原文】頓とんのもの縫ぬいふ糸。
【訳】（短くても、その方がよいもの）急ぎの仕立物を縫う糸。理由は簡単です。糸を引っ張って止めるのに手間がかかる。深くはありません。集め方の妙ですね。

五 名文

—— 過ぎに過ぐるもの。（二百四十二段） ——

ただ過ぎに過ぐるもの。

帆ふかけたる舟。

人の齡とし。

春・夏・秋・冬。

「ただ」はひたすらの意。

実は私はこの一節が一番好きです。『枕草子』を全部読んでみたいと思っただきっかけになったように思います。

六 女法師

—— こと物——（八十二段） ——

【原文】

「こと物は喰はで、ただ仏の御おろしをのみ喰うか。いと尊きこと」

などいふ気色を見て、

「などか、こと物も食たべざらむ。それがさぶらはねばこそ、とりまうせ」

民間人にスポットが当てられるのは、八十二段（雪山つくり）と二百九十四段（僧都の御乳母のほのままなど）ですが、圧倒的な存在感を示すのは、「常陸のすけ」とあだ名をつけられた女法師です。

お供えを下げてくれという女法師に清少納言は、「他の物は

食べないで、ただ仏様のお下がりだけを食べるのか。とても尊いことだ」

と皮肉ります。その答えが、直球です。

「どうして、他の物を食べないことがありましようか。それがございせんから、(お下がりを) 頂くのです」

女法師は乞食芸人。身分社会の最下層の人です。それが職の御書司あたりをうろついていたのですから、貴族と庶民の距離は意外と近かったのかも知れません。

八十二段は枕草子のなかでも傑出した章段だと思えます。物語としても圧倒的な面白さです。

七 言葉は千年の時空を越える

——何も何も、小さきものは、みな愛し

(百四十四段) ——

愛し^{うつく}し^くかわいらしい。主に人間に使った「愛し^{うつく}し^く」を動物やものにまで使っています。清少納言の独自の世界観です。読み進めていけばこんな文章に行き当たるのも楽しいです。

私達は「かわいらしい」の言葉の中に「愛」があるのを知っています。千年前と現代の言葉がつながっているのが分かります。同じ日本人だから分かるのでしょう。清少納言の言葉と自分の言葉が一つになる。それは至福の時。千年飛べた。

八 清少納言は不美人？

——醜きも、さこそはあらめ

(二百五十三段) ——

【原文】人の容貌は、をかしようこそあれ。憎げなる調度の中にも、一つよき所の、目守らるるよ。「醜きも、さこそはあらめ」と思ふこそ、わびしけれ。

【訳】人の顔かたちは、面白いものだ。みっともない道具立て(目・鼻など)の中でも、一箇所よいところに、目を引かれるものだ。「醜いところも、それと同じに(目をひくに) 違いな

い」と（私なんか）思うのが、情けない。

清少納言は自虐的に「自分は不細工」と言っているのが多いようです。ただ、中宮が婉曲に清少納言の不器量をからかう箇所があります。

「葛城の神も、しばし」（葛城の神も、もうちょっといたらよかろう）（百七十六段）。

これも、夜しか姿を見せない清少納言をからかったともとれます。（葛城の神はその醜貌を恥じて夜だけ働いたといわれている）

「それでは、お前はどう思う」と聞かれたら、残念ながら、不美人説をとります。「醜きも、さこそはあらめ」の件は不美人にしか書けない。

九 ユーモア

――かしこきか、面なきか（二百六十段）――

【原文】されど、倒れで、そこまでは行きつきぬるこそ、かしこきか、面なきか、思ひ辿らるれ。――

【訳】でも、倒れもせず、車のところまで行き着いたのが、えらいのか、図々しいのか、判断に迷ってしまう。

積善寺に行くために牛車に乗るまでの描写です。可愛いユーモアです。

――かこちつべし――（二百六十段）――

【原文】まことに、「頭の毛」など、人のいふ、さらに虚言ならず。さてのちは、髪あしからむ人もかこちつべし。

【訳】ほんに、「髪の毛（が逆立つ）」などと、人が言うのも、決して嘘ではない。そんなことがあった後は、髪の毛の悪い人も（あの時髪が逆立ったからだ）口実にするだろう。

素晴らしい行列の感想です。「さてのちは」はとてもユニークですね。これは読者を笑わせようとしています。清少納言のサーブिस精神です。清少納言は結構読者を意識しています。『枕草子』は今で言うベストセラ―だったのかも知れません。

十 身分

――夜殿よどのに寝て侍りける童女わらわも

(二百九十四段)――

御匣殿おんげいどのの御扇おんあふに坐っていると、ある下僕が一人、縁側近くに寄ってきて、馬寮うまじょうの秣まぐさを積んでいた隣家からの出火で類焼したと窮状を訴えます。下僕の夜殿と言う言葉が女房たちのひんしゆくを買います。下僕の方で夜殿(寝所)なんかあるの。どんなお屋敷に住んでいるの。一部屋しかないくせに。そのあたりを皮肉った和歌を清少納言が書いて、女房が下僕に渡すと、ただける物品の品書きだと文盲の下僕は勘違いします。

「それほど素晴らしいものを手に入れた以上、何をくよくよ思うことがあるう」

と文盲をからかいます。

「人に読んでもらったら、どんなに腹を立てたことでしょう」と、また、笑います。類焼した下僕への同情のかけらもありません。清少納言の上から目線の底にあるのは身分です。

十一 位

――位くらひこそ、なほめでたき物はあれ

(百七十八段)――

『位は、何といっても素晴らしいものだ』

清少納言の価値観です。平安時代の価値観かも知れません。人間は無視。位くらひです。位が人を変える。

――『身を変へて天人』などは(二百二十八段)――でも極端なことを言っています。

「雑色の、藏人になりたる、めでたし。去年の霜月の臨時の祭に、御琴持たりしは、人とも見えざりしに」

【訳】雑色ざっしきが六位藏人になったのは、素晴らしい。去年の十一月の臨時の祭に、和琴を支えていたのは、(琴の台みたいで)人間とは見えなかったけれど」

位がなければ物に見えたんですって。

十二 清少納言をめぐる貴公子達

——「やや、まかりぬるもよし」

(三十二段) ——

清少納言に好意を寄せる貴公子が沢山出てきます。もてたんですね。それぞれの性格もきっちりかき分けています。

その中でも私が一番印象的なのは、「小白河といふ所は」の藤原義懐（よしか）のこの科白（しらか）です。八講（はつかう）を中座しようとする清少納言にかけた言葉です。

「おい、おい。元輔の生意気な娘さん、もうお帰りなの。『退散するのもし』か」

(釈迦の説法中に席を立とうとした五千人に向かって『退散するのもし』と言った故事を引いています)

義懐はいかにも好き者という感じです。清少納言に軽口をたく絶頂期の義懐には二十数日後の出家という運命が待っています。花山天皇の出家した姿を見た義懐はその場で自分も出家します。時代は大きく動きます。おちゃらけな義懐との落差に感動します。

十三 端役の女

——清少納言はいやな女だ！——

端役にも面白い女性が沢山登場します。

九十八段の下仕の「糸ぬたき」は面白い。糸ぬ（いとぬ）＝犬。たき（たき）＝高。で、犬のように背が低い。犬のように背が低いのでついたあだ名でしょうか？ 背が低いのに名高き。賢（とら）かったようです。

打臥（うちふし）＝打臥の巫女（百五十五段）。これは名前だけ出て来ます。これも賢（とら）かった。名前を聞くだけで想像力が刺激されます。

最後は「成信（なりのぶ）の中將は（二百七十四段）」に出てくる兵部と言う女房です。この女は 変わった旧姓（しよせい）（著？）の女房です。女房たちもあだ名みたいに、旧姓を呼んで（よ）んでいます。

兵部は清少納言に憎まれ、思いきりけなされます。発端は成信と真夜中に長い間しゃべっていたことです。私にはそれが憎しみの全てだと思えます。「素敵な成信様と不細工な兵部が一晩中喋るなんて、許せない！」

本人は狸寝入りして出て行かなかったくせにね。勿論そんな話はおくびにも出さず、ただただ論破します。そのしつこさは凄まじい。思わず言ってしまった。

「清少納言はいやな女だ！」

十四 ドキュメンタリー

——道長が跪いた——

関白殿、黒戸より出でさせ給ふとて（百二十三段）は道長の性格を見事にドキュメンタリー風に描いています。

関白道隆が黒戸から、いつもの軽口を叩きながら、女房たちをかき分けて出て行くと、権大納言（伊周）が沓を履かせます。

「まあ素晴らしい。大納言ほどの方に、沓をお取らせ申されるなんて」

絶頂期の関白道隆の活写の後に緊迫した場面が描かれます。

「宮の大夫殿は、戸の前に立たせ給へれば、「ゐさせ給ふまじきなめり」と思ふほどに、少し歩み出でさせ給へば、ふとゐさせ給へりしこそ」。

「宮の大夫殿」は後に権力者の頂点を極める道長。「ゐさせ給ふまじきなめり（ひざまずかれるおつもりはないだろう）」の一文が緊張感を高めます。すなわち、跪くか、跪かないかが注目的だった。清少納言は、跪かないと予想します。しかし、道隆が少し動くと、それに合わせるように道長がさっと跪いた。私は道長のしたたかさを感じます。

『枕草子』の魅力の一つは、歴史上の人物が生身の人間として描かれていることにもあります。

また、道長みたいな大物ばかりでなく、清少納言が描くのは、したたかな平生昌（五段）、ユニークな元夫の橘則光（七十七段）、笑われる変人源方弘（百三段）、軽薄な源宣方（百五十四段）等々多彩です。

その他、歴史の闇に消えてしまった人々までが、陰陽師、説經の講師、牛飼(うしわ)童(わらわ)等々が平安という時代を生き生きと動き回っています。

十五 虫は(四十段)

——鬼の生みたりければ——

【原文】糞虫みんじ、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、「親に似て、これも恐ろしき心あらむ」とて、親の、あやしき衣ひき着せて、

「今、秋風吹かむをりぞ、来むとする。待てよ」

と言ひおきて、逃げていにけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば、

「ちちよ、ちちよ」

と、はかなげに鳴く、いみじうあはれなり。

ほとんど現代語訳なしで読めます。「親のあやしき衣ひき着せて……」|| 素晴らしい想像力ですね。「ちちよ、ちちよ」|| 父よ、父よ。それとも、乳よ、乳よ。

芭蕉の俳句に「糞虫の音を聞きに来よ草の庵」があります。『枕草子』を読んでいたのでしょうか。次の「ぬかづき虫」も名文で、小さな虫に寄せる愛が切ない。

ぬかづき虫、またあはれなり。さる心ちに、道心おこして、つきありくらむよ。思ひかけず暗き所などに、ほとめきありきたるこそ、をかしけれ。

【訳】コメツキムシ、これもまた殊勝な虫だ。こんな小さな虫の心にも、信仰心をおこして、拝み回っているよ。思いがけない暗いところなどに、コトコト音をたてて歩き回っているのは、本当に面白い。

コメツキムシをつまんでコックン、コックンさせていたのを思い出します。近頃は見ないなあ。でもきつと今も、暗いところで拝みまわっているのでしょう。世界のどこかで。

十六 みんなと仲良くしたい

— 宮仕へする人々の、出て集まりて
(二百八十四段) —

宮仕へする女房が自由に集まる私的なサロンの夢を語っています。当然ボスは自分。宮使いが大好きだったんですね。そして、人好きで世話好き。高貴な方々の内輪話も知りたい！

「清少納言は一人ではいられない女」
誰かが言っていたなあ。私も、そう思いますよ。

十七 雪三題

— 雪降りにつけり (百七十六段) —

『枕草子』には、雪に関する段が沢山あります。雪の山がなくなるかなくならないか、スリリングな展開の八十二段。有名な香炉峰の雪 (二百八十段)。そして、多分私だけが感動している雪。宮にはじめてまゐりたる頃 (百七十六段) の雪です。

「宮にはじめてまゐりたる頃、ものの恥づかしきことの数知らず、涙も落ちぬべければ」

宮使いを始めた頃の回想です。

早く自分の部屋に帰りたい。夜が明けて格子が上げられ、醜い自分の姿を見られたらと思うと、とても辛い。消えてしまいたい。

そんな気持を察してか、中宮は女儒が格子をあげるのを制します。やっとの思いで膝行して姿を消すのを待ちかねて、(女儒が) どんどん格子を上げたところ、唐突に雪の描写になります。

「みざり隠るるや遅きと、上げ散らしたるに、雪降りにつけり」
この雪です。

十八 文

— 恋文 —

文、特に恋文に平安人は凝りに凝りました。これによって自分の身の程や心の程が計られたのです。手紙を、物の枝につけるのは、当時一般の風習でした。なんの枝につけるかは大問題だったでしょう。

二百七十五段「常に文おこする人の」に「散らし書き」の手紙が出て来ます。

ここでの注目点は、文字の書き様ですね。文字の書き方で気持ちを表したのでしょう。大きく小さく、濃く薄く、整ったり乱れたり、愛する心を伝えたい。文字は心模様でもあったのです。

最後は凄い場面です。

「額髪長やかに、面様よき人の、暗きほどに文を得て、火とすほども心もとなきにや、火桶の火をはさみ上げて、たどたどしげに見るたるこそ、をかしけれ」

【訳】額髪が長くて、顔立ちの美しい女性が、暗い時刻に手紙を受け取って、火を灯す間もどかしいのか、火鉢の火を挟み上げて、たどたどしく見ているのは、実に面白い。

愛しい人の言葉を一秒でも早く読みたい。聞きたい。感じたい。燃えないか心配です。手紙も女も。

十九 歌枕

—— 関は（百六段） 森は（百七段） 原は（百八段） ——

百六段〜百八段まで歌枕が続きます。地名の羅列ではないかと思う人がいるかもしれません。

清少納言は諸国の名所を和歌で知っていました。実際に行ったり見たりしたことは殆どなかったでしょう。でも、和歌はこの時代の共通語でした。「歌枕」で歌を思い出し、歌で風景を見、そこにいる人々の心を知り、物語の世界に遊んだのでしょう。写真やビデオなんかよりも楽しかったのでしょう。そこにちよこちよこ言葉遊びを交えます。

「よしよしの関こそ、『いかに思ひ返したるならむ』と、いと知らまほしけれ」

【訳】よしよしの関（まあいい）は、「どうして、思いとどま

ったのだらう」と、とても知りたくなる。背景にあるのは、全部「恋」です。だから、楽しかったのでしょうか。

二十 雨嫌いの筈が

—— 荒れたる家の蓬よもぎふかく（一本二十五） ——

「池ある所の、五月長雨の頃こそ、いとあはれなれ。菖蒲・菰こもなど生ひ凝りて、水も緑なるに、庭も一つ色に見えわたりて、曇りたる空をつくづくと眺め暮らしたるは、いみじうこそあはれなれ」

「雨嫌い」だった作者の心境の変化でしょうか？ 宮使いを終えてからの生活に思いを馳せているのでしょうか？ 荒れた家で老後はゆっくりと暮らしたい。そんな日常に雨はよく似合う。

二十一 『枕草子』と笑い

—— 笑い ——

とにかく、枕草子の登場人物はよく笑います。二段の「ころ」には七回笑います。櫛が折れたと言っては笑い。馬を驚かしては笑い。お粥を炊いた木でおしりの叩きっこをして笑います。人生のよろこびは笑うこと。

あとがき

『枕草子』にテーマや思想がないと批判されるのは、ある面で正答かもしれません。清少納言は思いつくままに、連想のおもむくままに書き散らしたと。

しかし、私は、『枕草子』は清少納言本人がテーマであり、思想である」と思います。随筆は自然であれ、人物であれ、自分を通して語るもの、すなわち、自分を語るものだと思います。

全段を読み切ると、清少納言が目の前にいるように、まざまざと見えてくるのです。私なんかは、「下藤」と一言で切って捨てられそうですが……。

千年の月日を経て、私たちは清少納言と向かい合うことができます。文学ってすごいですね。

一方、『枕草子』を読むというのは千年前の言葉を理解することです。素人の私には一語一語の解説です。語釈ノートを作り、PDFファイルの原文に注釈を書き込みました。随分長い時間がかかりました。それをまた、現代語に訳すのも大変でした。時々「何のためにこんなことをしているのだろう」という疑念が頭をよぎりました。しかし、何度も読んでいるうちに言葉の壁は消え、清少納言の声がダイレクトに聞こえてきました。平安の人々も今の私達と少しも変わらない。恋をし、笑い、泣き、怒り、自然と親しみ、人それぞれの時間を生きました。現代のような物質的文化的発達はないが、その分、精神的な文化は豊かだったと思います。私達の先祖もそこに生きていた。間違いなく現代と平安時代は繋がっています。「読めてよかった」と心底思います。

平成二十八年 桜の咲く頃。

【参考文献】

- 『新潮日本古典集成「枕草子」』 萩谷朴・校注（新潮社）
『新日本古典文学大系』 渡辺実校注（岩波書店）
『「枕草子」の歴史学』 五味文彦（朝日新聞出版）
『日本古典文学全集「枕草子」校注・訳』 松尾聰 永井和子（小学館）
『新版 枕草子』 石田穰二訳注（角川ソフィア文庫）
『「枕草子」全訳注』 上坂信男 神作光一（講談社学術文庫）
『桃尻語訳 枕草子』 橋本治（河出文庫）
『大人の塗り絵ノート「枕草子絵巻」編』（角川書店）

私なりの枕草子

<http://p.booklog.jp/book/107248>

著者：池窪弘務

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ikekubo1946/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107248>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107248>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ